

木犀木だより

—— 友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌 ——

vol. 54
2025 秋号



すずき出版発行「心のうたかれんだあ」(平成3年版)より 詩／坂村真民「木犀咲く」 画／海野阿育

坂村家のアルバム

vol.24

真民一家の新たな船出——四国へ——

昭和20年11月、坂村真民と久代、お腹の子供、一歳半の梨恵子は、母親が待つ故郷熊本に帰り着きました。そこには既に、真民の弟（俊夫）一家も横浜から疎開していました。翌年の2月23日に久代は無事出産しますが、実家はとても狭く小さい家だったので、どの部屋でお産したのだろうと今でも不思議でなりません。「三人の子に」という詩、佐代子に「の一部を紹介します。

佐代子に

お前が生まれる時
わたしは一番くるしんでいた
どうして生きてゆこうかとくるしんでいた

（中略）

お前が生まれた時
読んでいたのは鷗外の著書だった
お前の名は

その「安井夫人」の中から貰ったのだ
それと代の字は

お前のお母さんの一字でもある
お母さんはお前をおなかにいれて
くるしい引き揚げをしてきた

そのお母さんの名前がはいつているのだ

（後略）



真民一家が四国で初めて暮らした三瓶のまちを遠くから望む

真民は、熊本県玉名郡八嘉村田崎（現・玉名市）周辺で仕事を探しますが、見つかりません。そうこうしていると、短歌誌「蒼穹」に載る真民の歌を読んで窮状を知った、愛媛に住む佐伯秀雄氏から教師の職の誘いがありました。氏が校長をしている、愛媛県南予地方の三瓶町にある私立山下第二高等女学校の国語の先生はどうかという、歌縁によるありがたいお話です。その女学校は、吉田町（現・宇和島市）出身の海運業で富を得た山下亀三郎が、母親のような女性を育てたいと創立したもので、第一と第二女学校がありました。真民は、いつも母への恩を胸に秘めていましたから心が動いたことでしょう。

こうして5月には、戦争で多くの船は徴用され僅かに残った老朽船の三等船室の客となったのです。母親、真民、妻、二歳の子、二ヶ月の赤ちゃんが肩よせあって、海は荒れ雨が降るなか、九州から四国へと渡ったのでした。母親は、味噌や醤油など持てるだけのものを抱えて付き添って行ったとの事。

やつと八幡浜に着いたときは、雨も風もおさまり、四国は初夏の香りで何とも言えぬ明

表紙の詩



木犀咲く(41歳)

何と木犀の多い町であらう
日のまだ出ない朝の通りに
日の入ってしまった夕の通りに
どこからともなく匂ってくるのは
木犀の甘い香りだ
枯れきったようなわたしの心に
少年の日の夢をよみがえらすような
青年の日の愁いをよびさますような
ほのかな香りだ
人間の世界の冷たさにくらべて
樹木の世界の何という美しさよ
静かな朝の日曜日子どもを連れ
まだ知らぬ通りを歩きつづける
かなしいまで高められてゆく
愛を感じながら

この詩は、昭和25年12月20日発行の「ペルソナ7号」に掲載されている詩です。

三瓶高校から吉田高校に転勤となり、吉田での生活が始まった年で真民が41歳の時の詩です。

木犀というと、金木犀ではなく銀木犀のことを言います。オレンジ色の金木犀に対し白い花びらを付けて、香りは金木犀と同じく甘い香りの花です。

「人間の世界の冷たさ」を感じていた真民に、新しい町での生活が始まるときに、若い時の「夢と愁い」を呼び覚ます木犀の甘い香りが、新しいこの町での生活に少し希望を与えてくれたのではないのでしょうか。

るい風が吹いていたと記しています。そこから三瓶町までまだ距離がありますので、一家は、駅前の旅館に落ち着きました。そこで母親が発した言葉、「四国は涼しいなあ、いい風が吹くなあ」と。

「涼しい風」、この言葉は、その後の真民の生き方の大きなキーワードとなってゆきます。

さて、山下第二高等女学校の運動場は、当時、さつまいもやかぼちゃの畑になっていたそうです。運動場の片側に職員住宅が並んで建ち、その端に建増した小さな家に落ち着きました。が、水屋敷と言われるほどじめじめ

していて、なめくじ、かたつむり、そして蚊、むかでに悩み、ただ、あやめの花のみ美しく咲いてくれたとか。そういう中でも、山羊を飼う猫もいて、貧しいながらも愛情溢れる日々の暮しが窺われます。

近くにやさしい軟水がわく泉があり、それを毎日の飲み水として生活し、「コギトの泉」と銘うっていたことは真民らしいと思いませんか。(学制改革で私立から県立三瓶高校となった後も、コギトの泉は校舎の一角に大事に残されていました。残念ながら本年廃校になりました。)

かたい決心をして渡ってきたものの、こころ悲しむいろいろなことが起こった。すべてはわたしが歌に執するがためであつたろう―これは、坂村真民歌集「石笛」の後半に綴られた一文です。終戦直後の混乱を背景に、真民はどう道をひらいてゆくのでしょうか。

文／西澤真美子

※コギト・エルゴスム「我思う、ゆえに我あり」という、デカルト哲学の根本命題を表現したものだ。

来館者からのメッセージ タンポポの綿毛

●ひとりひとりが自分の中にある無限の愛に気が付くことが出来る。真民詩と先生の生き方は世の中の闇を今もひとつひとつ光へと変容させ続けています。(40代・男性)

●日々を考えることがたくさんありますが、良い方向に向いて生きたいと思いました。(40代・女性)

●「生きる」ということをいくつになっても真民さんのように問い続けたいと思います。(60代・男性)

●心が洗われた気がします。生きる勇気も生まれます。有難う。(70代以上・男性)

●苦しい時悲しい時、いつも支えてくれてありがとうございます。(60代・男性)

●力強い言葉にふと涙がでる。心に触れるような詩がありありがとうございます。(30代・女性)

●辛いことばかりの日々でしたが希望をもって生きて行けそうです。(60代・女性)

●行き詰った時、詩を思い出していいと思います。(20代・男性)

●もともと真民さんの詩に目を向け一つでも多くの詩を知り、自分に照らし合わせて、生活していきたいです。すてきな詩をたくさんありがとうございます。(20代・女性)

●心に迷いが生まれた時真民さんの言葉を思い出します。(30代・男性)

●元氣になりました。無理せずありのまま生きていけたらいいですね。(60代・女性)

●真民さんの言葉を思い出しながら、また歩いて行くという気持ちにさせてもらいました。(70代以上・女性)

●初めて記念館に来て、真民さんの物事のとらえ方、生き方に触れました。つらい時や苦しい時も明るく前向きに生きて行きたいと思いました。(20代・女性)

●前向きに生きることを改めて認識できました。(20代・男性)

●弱っている心に栄養をたくさんいただきました。ありがとうございます。(70代以上・女性)

●心が折れそうな時や楽しい時も真民さんの詩を思いながら少し頑張って生きて行きます。有難うございました。(60代・女性)

●あなたの生き方、感じ方に憧れを抱きました。(30代・男性)

●ほんの少しですが、自身の生き方でもいいんだと肯定された気持ちになりました。(50代・男性)

●自分自身を振り返ることが出来ました。悩んだ時、迷った時、しんどい時：また来させてください。(60代・女性)

●数年前に主人を亡くして、心のどこかに穴が開いたようでした。どうしても来なかった。前向きな気持ちになりました。(60代・女性)

●小さくてもいい精一杯生きる勇気頂きました。ありがとうございます。(70代以上・男性)

●子育てで悩み多き毎日ですが、真民さんの言葉から多くのヒントを頂けました。(40代・女性)

●小さなことで、くよくよしている自分にちっぽけさ、頭を上げる元気を頂けたような気がします。(60代・女性)

●心を揺さぶるような詩に元氣をもらいました。(40代・女性)

●私の心が荒れている時など、心を静めてもらえるような。(70代以上・男性)

●心静めるために来たいです。ありがとうございます。(50代・男性)

次回企画展

「真民さんのまなざし ～真民さんが見つめていたもの～」

開催期間

開催期間 2025年10月11日(土)～2026年3月1日(日)

休館日／月曜日(祝日の場合は翌日)、12月29日～1月1日

地球という小さな星の中で、つまらない争いごとが各地で行われ、自分たちの命をも脅かす核兵器を所持する国が、その力を背景に世界をリードするという時代にあっても、人間としての尊厳を持って生きることの大切さを、日々に留めて生きてゆくことが、今求められていると思います。

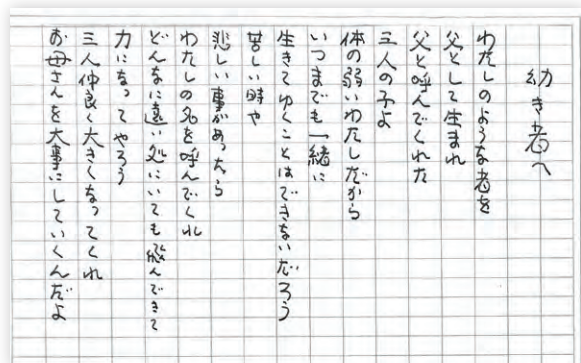
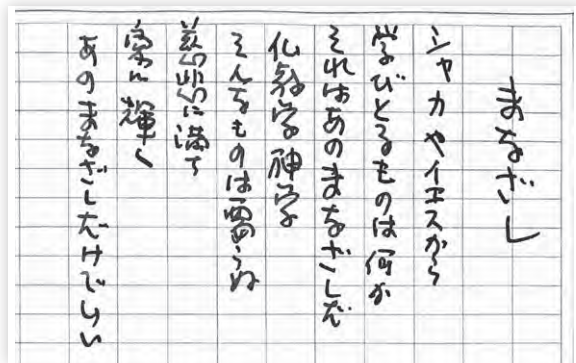
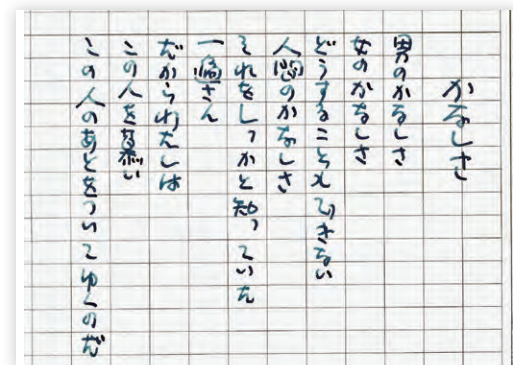
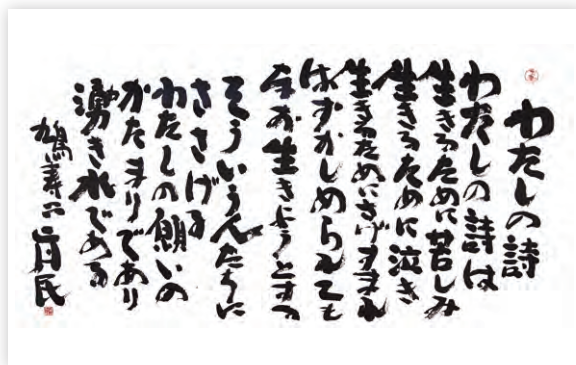
坂村真民の生き方を考察し、そこから分かることは、どんな時代にあっても、変わらない「人間としての生き方」というものを常に考えて、日々自分の生き方を反省し、自分を厳しく戒め、「今日よりは、一歩でも前に進む生き方」を心がけていたことが分かります。

「真民さんのまなざし」は、生きとし生けるものへのや

さしさと愛情あふれるまなざしです。しかし、自分自身
を見つめるまなざしは、いつも厳しいまなざしでした。

真民詩の中で、真民さんが使っている「まなざし」とは、その人の見る眼、その人の生き方、その人の志という意味で使っています。

今回の企画展では、「真民さんのまなざし」について多面的に取り上げ、「世界を見つめるまなざし」から「生きとし生けるものへのまなざし」、「家族へのまなざし」、「人間として生きるためのまなざし」という観点から詩を選び、そこで真民さんが何を書き、何を訴えているのかを解説・展示しています。



心をこめて、真民さんの詩を歌う

のむらクローバーコーラス・男声合唱団ジェントル・ゲザング指揮者 宮本 欣子

女性合唱団「のむらクローバーコーラス」は、心をこめて真民詩を歌い続けている。メンバーの宮本さんは、念ずれば、大勢の方々に助けてもらいながら花がひらいたと感謝し、人々の心に花がひらくことを願う。

◆真民さんの詩を歌う

今から四十年ほど前になります。道徳の教科書に「光る」という詩が載っていたのが真民さんの詩との初めての出会いでした。私自身は自ら光りはいないけれども、いろいろな方々によって光ることができると、なんだか心が温かくなったのを覚えています。

それから二十年ほど月日が流れ、真民さんの詩とより深く出逢うきっかけが、女声合唱団「のむらクローバーコー



のむらクローバーコーラスと男声合唱団ジェントル・ゲザングの皆さん(左端が宮本さん)

ラス」のメンバーさんからの「この歌が歌いたいです!」という言葉でした。

2011年2月11日、「念ずれば花ひらく」を宇和文化会館のステージで歌うことができ、お越しくださった真美子さんに初めてお目にかかりました。私たちの合唱に涙を流してお聴きくださった真美子さんの姿に、6月のお母さんコンクールでは、「念ずれば花ひらく」「二度とない人生だから」を、より心を込めて歌わせてもらおうと誓った日となりました。

のむらクローバーコーラスの河野さんは、吉田高校で真民先生に国語を教えていただいたそうです。「またみ」先生とお呼びし、楽しい授業だったこと、そして野村シルク館で「織り姫」として真美子さんと一緒に繭から糸を紡がれたことをお話くださり、真民さんとのめぐりあいをととても喜ばれています。

◆念ずれば必ず花はひらく

吉田時代、目を患われ、片方の目が見えなくなった真民さんは、お母様のタネさんがいつも唱えていた「念ずれば花ひらく」という言葉を自分も唱えるようになられました。

「念ずれば花ひらく」、この言葉を口にしながら、私の想いが花ひらいたこ

とが二つあります。

一つは、令和4年の坂村真民記念館十周年記念で「念ずれば花ひらく」「二度とない人生だから」を、重信コーラスさん、伊予銀行合唱団さん、ジェントルゲザングのメンバーと共に歌わせていただいたことです。いつか、全国から「念ずれば花ひらく」「二度とない人生だから」を歌いたいという皆様にお越しただいて、砥部の地で共に歌いたい—この想いは持ち続けます。

もう一つは、西澤孝一館長さんと真美子さんをお招きして、「真民さんの詩を歌うコンサート&講演会」を行わせていただいたことです。「一番いい人」「ふるさとの木の葉の駅」「念ずれば花ひらく」「花・ねがい」「二度とない人生だから」を、心を込めて歌ってくれるジェントルゲザングとのむらクローバーコーラスの皆さんのお陰です。

「念じていてください。かならず、花はひらきますから」と、真美子さんが私に声をかけてくださいます。優しいお心をいただき、いろいろな方々に見守られ、助けていただいて、花ひらくことに心より感謝します。そして、お一人お一人の心に、たんぽぽの花が咲きますことをお祈りしています。



『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り

千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四 真民詩

南木曽木材産業株式会社

〒399-5302 長野県木曽郡南木曽町吾妻1187 代表取締役 柴原 薫

TEL 0264-57-4000 FAX 0264-57-2006 <http://www.nagiso.co.jp> メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院



介護付有料老人ホーム
To-be

全78居室/20㎡~24㎡(1F&2F)



住宅型有料老人ホーム
モンレーヴ砥部

全18居室/40㎡~90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1(砥部病院西隣) TEL.089-969-0085 砥部病院ケアサービス株式会社



医療は 人なり

徳真会グループの想い

医療法人徳真会グループは、1981年新潟県の旧新津市という地方の小さな町より始まりました。ユニット3台、スタッフ6名といった、どこにでもある様な小さな歯科医院からスタートし、以来45年間、常に患者さま本位の歯科医療の在り方を追求し続けてまいりました。

また、国家依存度の低い自立した組織運営を模索し、「世界が舞台」という意識で組織創りを目指してまいりました。

現在、年間70万人の患者さまにご来院いただく、日本最大級の歯科医療グループとなっていますが、時代先駆の歯科医療グループの創造を目指して、私たちの挑戦はまだまだ続きます。



新潟、宮城、東京、大阪、福岡に30医院。
詳しくはホームページをご覧ください。

徳真会グループ

検索

www.tokushinkai.or.jp



念ずれば
花ひらく
苦しいとき
母がいつも口にしていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった
そうしてそのたび
わたしの花が
ふしぎと
ひとつひとつ
ひらいていった

坂村真民

私たちは坂村真民記念館を応援しています。

株式会社 アイビ広告

代表取締役会長

吉田 秀明

株式会社 スカイネットシステム

代表取締役

中岡 富茂

社会福祉法人 宗友福祉会

会長 丹生谷 宗久

株式会社 そごうマート

代表取締役 城戸 陽一

株式会社 よんやく

代表取締役社長

加賀山 誠

株式会社 致知出版社

代表取締役

藤尾 秀昭

坂村真民記念館友の会 会員募集中

坂村真民記念館友の会は、会員の皆様と記念館との交流を図り、記念館を共に支え、育てていくことを目的とした会です。入会された方には会報と、真民グッズなどの記念品を贈呈します。

パスポート会員 年会費2000円	特典	会員証で入館無料1人 ほか
一般会員 年会費5000円	特典	会員証で入館無料1人 ほか
特別会員 年会費10,000円	特典	会員証で入館無料2人 ほか
法人会員 年会費10,000円	特典	会員証で入館無料2人、 観覧券10枚贈呈 ほか

詳しくはホームページをご覧ください

坂村真民記念館 友の会

検索

〈編集後記〉

「坂村家のアルバム」にて紹介した詩に登場する森鷗外著「安井夫人」は、心に静かに響き、心の奥深くに残る短編です。機会があれば、読んでいただければ幸いです。読書の秋の一冊として。

(真美子)

タンポポだより vol.54 秋号

令和7年9月1日発行

発行元／坂村真民記念館友の会事務局

〒791-2132 伊予郡砥部町大南705 坂村真民記念館内

TEL089-969-3643 FAX089-969-3644

〔坂村真民記念館〕

開館時間／9～17時(入館は16時30分まで)

休館日／月曜(月曜が祝日の場合は翌日)、12月29日～1月1日

入館料／65歳以上300円、一般400円、高校生・大学生300円、

小・中学生200円 ※15人以上の団体は割引あり